

生活科では、気付きの質の高まりが深い学びであると捉えることができます。気付きの質を高めるためには、体験活動と表現活動が豊かに往還することの相互作用を十分理解して単元を構成するとともに、伝え合い交流する場を工夫したり、振り返り表現する機会を設けたりするなどの指導を充実させることが大切です。

体験活動と表現活動が豊かに往還する単元構成例

体験活動が質的に高まっていく単元を構成するために、単に活動や体験を繰り返すのではなく、話し合いや交流、伝え合いや発表などの表現活動を適切に位置付けることが大切です。下に示すような体験活動と表現活動の相互作用が、学習を質的に高め、児童一人一人の深い学びをつくりだします。



生活科の学習過程（例）

思いや願いをもつ → 活動や体験をする

思いや願いをもたせることで、目的意識が明確になり、体験活動への意欲が高まる。

言葉、動作、劇化などで多様に伝え合ったり振り返ったりして成功の喜びを味わわせ、その後の学習や生活への意欲と工夫を引き出す。

見付ける、比べる、たとえるなどの分析的に考える経験や、試す、見通す、工夫するなどの創造的に考える経験をもたせ、思考力・判断力・表現力の基礎を養う。

表現する・行為する ← 感じる・考える

上記の過程は一定のものではないため、単元にふさわしい展開を弾力的に考えることが重要です。

伝え合い交流する場を工夫する



「年長さんを招待しよう」の事前学習において、年長さんの立場になって体験した感想を交流した例

- A児「1班のゲームをやってみましたが、一列に並ぶとゲームが見えないから、どうしても前に出たくなりました。」
- B児「年長さんを一列に並ばせたら、見たくて動き回るかも。」
- A児「ゲームの周りに輪になって並んでもらったらどうかな。」
- B児「そうか。見ると動き回らないし、わくわくするよね。」

→相手意識や目的意識に支えられた交流を行うことで、相手の気持ちを考えようとする気持ちが高まり、他者の思いや願いに寄り添った気づきを引き出すことができます。

振り返り表現する機会を設ける

生活科の学習では、振り返って表現したときに、初めて実感的な気づきを獲得できることがあります。授業の終末では、気づきが曖昧なままシートに書かせたり発表させたりせず、次のようなやり取りを行って思考を整理させることも有効です。

「めざせ！お手伝い名人」の活動において、振り返りの記入前にペアでインタビューを行った例



- C児「なぜ、洗濯物たたみをしようと思ったのですか。」
- D児「Oさんの発表を見て、私の服もお母さんが一生懸命たたんでくれているんだなあ気が付いたからです。」
- C児「今日の勉強で、なるほど、と思ったことはありますか。」
- D児「△さんが、お手伝いをする自分もうれしくなると言っていたことを、なるほど、と思いました。自分がお手伝いしたときの気持ちを思い出しました。」

→このように言葉によるやり取りを通して振り返ることで、無自覚だった気づきが自分の中で明確になったり、他者の気づきに共感したりして、気づきの質を高めることができます。

この他にも、「試行錯誤や繰り返す活動を設定する」「児童の多様性を生かし、学びをより豊かにする」ことも重要です。